様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：２５５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３０２４２

研究課題名（和文）経済学のフランス的起源―功利主義との関連で―

研究課題名（英文）French origin of Economics: in relation to utilitarianism

研究代表者
米田　昇平（Yoneda, Shohei）

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：２０１８２８５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：ボワギルベールの画期的な「レセ・フェール」の経済学の源泉は17世紀のフランスの新思潮にあった。本研究はジャンセニストのピエール・ニコルとボワギルベールとの関係に焦点をあて、そのことを論証した。そして、17世紀の新思潮の流れを汲むフランス起源の経済学の特徴は、功利・効用を価値判断の基準とする点で、功利主義的な性格を持ち、理論的には、消費の生産に及ぼす影響を強調する消費主導論に現れていることを明らかにした。ここに経済学のフランス的起源を見出すことができる。

研究成果の概要（英文）：The source of the epoch-making Laissez-faire’s Economics of Boisguilbert was in the new trend of French thoughts of the 17th century. This study focused on relations with Jansenist Pierre Nicole and Boisguilbert, and proved it. And this study made it clear that the characteristic of French Economics that descended from the new trend, had the utilitarian character at the point where value was based on utility, and that theoretically, the characteristic showed itself in consumption theory which emphasized the influence to production of consumption. Here, we can find French origin of Economics.

研究分野：経済学説・経済思想

キーワード：経済学の起源　フランス功利主義　ボワギルベール　ジャンセニスト　奢侈論争　啓蒙の経済学

１．研究開始当初の背景

（1）2005 年に上梓した拙著、『欲求と秩序―18 世紀フランス経済学の展開』（昭和堂）において、ボワギルベールの自由主義の経済学に始まる 18 世紀フランス経済学の展開に経済学の多元的な成立・形成の一翼を担いうる独自の流れを見出すことができることを明らかにした。このボワギルベールの画期的な自由主義の経済学の源泉をどこに求めるかが次の課題となった。

そこで 19 年度に採択された科学研究費補助金（課題名「世俗化の論理・倫理とフランス経済学の形成」20～22 年度）を活用しながら、17 世紀後半のフランスの新思潮とボワギルベールの自由主義経済学との関係性を解明しようとした。みえてきたことは、ピエール・ニコルなどのアウグスティヌス主義のボワギルベールへの影響であった。

（2）フランスの新思潮は、ジャンセニストのピエール・ニコルやジャン・ドマ（あるいはパスカル）、モラリストのラ・フォンテーヌやラ・ロシュフコー、リベルタンのピエール・ベールなど多彩な文人や思想家によって形作られていくが、この新思潮はイングランドのマンデヴィルの思想的源泉でもあった。ボワギルベールや彼以降のフランスの著作家とマンデヴィルとの関係をどう捉えるか、このことが新たな課題として浮上した。

（3）この新思潮は、近年、経済学の源流として注目されてきたが、しかしその研究は、おもに宗教思想史や文学史や哲学史の領域で行われてきたこともあって、経済学の生成と関連づけるときでも、スミスへと至るラインにおいてマンデヴィルの思想的源泉として注目されるのがせいぜいであり、ボワギルベール研究など従来の経済思想史研究を十分に踏まえていないため、可能な成果を生み出すことができないでいた。

２．研究の目的

以上の研究開始当初の状況を踏まえ、次のような目的を設定して研究を行った。

（1）17 世紀後半のフランスの新思潮を源泉とする功利主義的な経済学の生成・展開に着目し、従来とは異なる視角から経済学の成立・形成のあり様を明らかにする。

（2）ピエール・ニコルの道徳論からボワギルベールがどのような飛躍を遂げ、「レセ・フェール」の秩序原理に基づく自由主義の経済学の創生へと至ったかを明らかにする。

（3）この新思潮を思想的源泉とするイングランドのマンデヴィルの特徴的な経済学の歴史的意義を英仏の思想的コンテキストに照らして明らかにする。

（4）フランス功利主義の源流となったこの新思潮は「安楽な暮らし」によって世俗の幸福を実現するという啓蒙の課題を突き付けることになるが、アベ・ド・サン＝ピエール、ムロン、モンテスキューの三者三様の啓蒙の経済学は、これにどのように答えようとしたかを明らかにする。

（5）さらにこうしたフランス経済学の展開を、奢侈論争の経過と重ね合わせて、その特徴を明らかにする。

３．研究の方法

以上の研究は、とくにわが国ではまったく未開拓の領域であり、しかも研究対象は宗教思想、文学、哲学の文献にも及ぶ。このため、幅広く関連文献を収集して読み込んだほか、従来から参加している思想史系の共同研究会以外に、思想史・哲学系の学会にも出席して、知見を深めた。

４．研究成果

(1) 主な成果

本研究は、まずニコルの道徳論とボワギルベールの「レセ・フェール」の経済学とを比較的に検討し、後者の飛躍のあり様を明らかにすることで、スミスに八〇年先んじた自由主義経済学の一つの生成に光をあてた。

この新思潮の特徴は、原罪説に立つアウグスティヌス主義の悲観的な人間理解に基づいて、人間を自己愛・利己心に駆り立てられる欲求の主体とみなし、「利益」志向の功利的人間像をクローズアップしたことである。ピエール・ニコルは、さらに自己愛に発する功利的情念はいかにして社会的効用を発揮して社会秩序の形成に寄与しうるか、という「情念と秩序」の関係に光をあて、自己愛による愛徳の偽装という欺瞞のメカニズムを析出して、自己愛という悪が世俗社会を維持する秘密に迫ろうとしたが、しかしニコルが社会秩序の最終的な拠り所としたのは、統治者が神慮に基づいて案出し維持する力ずくの政治的秩序であった。この意味で、生活の便宜や安楽を求めてやまない人間の功利的行動は、宗教・政治の規範にしっかりと繋ぎとめられていた。

これに対し、宗教の羈絆から自由なボワギルベールは、市場機構という自己愛の抑制装置の発見によって自律的な経済秩序の存在を明らかにし、経済世界の規範的自立を論証した。これによりボワギルベールはニコルの立つ地平からの飛躍を成し遂げる一方で、堕落した人間の「豊かさへの願望」あるいは消費欲望の本源性に着目し、消費不況論など消費主導の経済ビジョンを呈示した。そして、

それは思想的源泉を同じくするイギリスのマンデヴィルの共有するところでもあった。

マンデヴィルは、功利・利益こそは人間の行動原理や社会の結合原理であると考え、この功利・利益を繁栄の原動力とする商業社会の現実を浮き彫りにした。「私悪は公益」という彼の逆説的命題の意味するところは、近代社会は労働・勤労と欲求の二重のシステムからなる「欲求の体系」であり、この社会を導く内発的な原動力は人間の内奥から発する境遇改善の本源的欲求あるいは奢侈の欲求である、ということであった。

したがって、相互的な諸欲求を通じて緊密に結び合った諸要素の連鎖を維持するのは、何より消費支出に用いられる貨幣の循環的流通であるから、消費・消費欲求の減退によってこの循環が収縮すれば、欲求の体系を支えるこのシステムは立ち行かなくなる。このような消費主導論はボワギルベールやマンデヴィルの功利主義的な経済学の特徴的な構成要素であったが、こうしたマンデヴィルの認識は奢侈容認論として集約され、ヨーロッパの思想界に奢侈の是非をめぐる大論争を惹起することになる。

一方、啓蒙の文脈との関係で言えば、利益追求を悪徳とみなすリゴリズムの呪縛を逃れて、「安楽な暮らし」によって世俗の幸福を実現するという啓蒙の課題に応えるべく商業社会の構成原理やその発展の論理を探求したのが、アベ・ド・サン＝ピエール、ムロン、モンテスキューであった。彼らは、ともに世俗的価値や世俗的倫理の普及によって生じた時代の大きな変容を受け入れ、商業の効用や経済の独自の領域の存在を認めたが、この新たな状況を前にして、その立ち位置は三者三様であった。

サン＝ピエールは、人間と社会に関するニコルなどの新思考をいち早く功利主義として定式化し、功利主義のリアリズムに徹して商業社会の進展がもたらす新時代の諸課題に向き合ったが、一方で公共的利益を優先する立場から奢侈（消費の自由）を批判し、商業と製造業の発展を促すためには、賞罰の制度を設けるなどの、私欲と公共的利益の一致をもたらす巧みな統治が必要であると考えた。

サン＝ピエールと同じ軌道上で、世俗的倫理が求める晴れやかな文明化の道筋を示してみせたのがムロンであった。経済学の知見によって啓蒙の課題に向き合ったという点でムロンは際立っていたが、近代経済のマクロ的構造の全体像を初めて捉えた彼の経済論説は、経済学の生成史上の重要な結節点となった。

これに対し、モンテスキューの商業社会論は、サン＝ピエールの商業社会賛美論やムロンの経済主義的な傾向とは一線を画すものであり、アウグスティヌス主義が虚飾・虚栄とみなして批判した英雄主義や理想主義を滲ませながら、経済的機能には還元できない政治的秩序の重要性を強調した。またムロンが消費の局面をおもに奢侈の視点から論じたように、啓蒙の経済学は、ムロンからヴォルテール、フォルボネ、ビュテル・デュモンなどへと続く奢侈容認論の系譜と重なっていく。

このように、一七世紀の新思潮の流れを汲むフランス起源の経済学は、経済社会を功利的人間の織りなす「欲求の体系」と捉える社会観や、功利・効用に富や価値の源泉を見出す効用理論・効用価値説などに見られるように、功利・効用を価値判断の基準とする点で功利主義的な性格を持っていたが、そのことは理論的には、消費循環の構想を含めて生産に対する（奢侈的）消費や消費欲求の規定性に着目する消費主導論に特徴的に現れていた。

これらの理論や観念の思想的な立脚点は、グラスランのような例外を除けば、基本的に商業社会・消費社会としての社会の現況を容認し、これをさらに推し進めようとするところにあった。進歩思想や経済主義に彩られたムロンの啓蒙の経済学がその典型であるが、一八世紀の中葉において、これをさらに一つの到達点へと導いたのが、農業の基盤の上に産業活動の盛んな「産業社会の構築を目標として掲げたフォルボネであった。

この流れはビュテル・デュモンの奢侈容認論・消費論、グラスラン、コンディヤック、チュルゴの効用価値説、さらにヴァンデルモンドを経て、一九世紀のデステュト・ド・トラシやセイへと引き継がれていく。こうした着実な系譜に、フランス起源の経済学の一九世紀にまで至る連綿たる歩みの一端をうかがい知ることができた。

以上のように、フランス起源の「もう一つの経済学の形成」を明らかにすることにより、単に経済学の多元的形成の一つのあり様を照らし出すという以上に、ヨーロッパ出自のこの新興科学の起源について、これまでとは異なるその像を浮き彫りにした。

（2）得られた成果の位置づけ

フランス経済学は、ボワギルベール以来、一八世紀中葉以降の商業社会批判やそれとリンクした経済学批判とも対峙しつつ着実な系譜を紡いでいく。この系譜は、この新興科学の成り立ちについて、『国富論』を経済学の生成プロセスの収束点にすえる場合とは異なる展望を与えるものである。

ケネー経済学の一面を重要な一要素として含むこのプロセスの収束点において、スミスは理論的にはミクロ分析とマクロ分析の両面でおもに生産視点に立って、資本や生産力の自己増殖という資本主義社会の自律的発展の展望を示した。

一方、フランス起源の経済学のメインストリームを担った著作家たちの経済論説の一つの特徴は、これとは対照的に、消費・消費欲求を生産やインダストリーの活動の規定

要因として重視する消費主導の経済ビジョンを描いたところにあった。旧体制から革命へと至る当時のフランス社会は、産業資本が主導する資本主義の経済システムとはほとんど無縁であったとはいえ、一八世紀初頭以来、世俗化の進捗や商工業の発展とともに商業社会・消費社会へと大きく変貌しつつあり、この変貌を写し取った彼らの経済論説は、現代へと繋がる近代経済の特徴的傾向を見事に照らし出した。

世俗的倫理と世俗化の論理に促されて人間の功利的情念が解放され、生活改善欲求などの富裕への願望を是とする世俗的価値が広く普及していることが、富裕の科学としての経済学の生成の条件であるとすれば、経済学は、何より消費欲望の本源性の認識の上に、そのような世俗の幸福を求める人間の功利的情念に応ずるべく構築されることになる。彼らの経済論説は、この意味でそれ自体、そのような功利的情念に応ずるべく求められた富裕の科学にほかならない。

こうして見ると、画期的な「レセ・フェール」の秩序原理に基づいて富裕の条件を探求したボワギルベールと、イングランドのマンデヴィルとが並び立つ、本研究が浮き彫りにした経済学の生成史上の新たな領野や、その沃野を潤した一七世紀のフランスの新思潮に経済学の起源を求める見方は十分に成立しうる。この点で、本研究は経済学の生成史研究に新たな知見を加えるものである。

（3）今後の展望

フランス起源の経済学の特徴は、欲求や効用の視点から人間の経済活動のあり方や経済社会のダイナミズムに迫ろうとする姿勢が際立っていることである。経済社会を功利的人間の織りなす「欲求の体系」と捉える社会観、功利・効用を価値判断の基準とする功利主義、功利・効用に富や価値の源泉を見出す効用理論・効用価値説、生産に対する消費や消費欲求の規定性に注目する消費主導論、経済行為の心理的誘因に着目する心理主義、さらには感覚論哲学における快苦原理をも含めて、これらの相互に親和的な理論や観念が、この時代のフランスの多くの経済論説の構成を彩っており、全体として一つの特徴的な傾向を形作っていた。

それらの相互関係は多様でありうるが、フランス経済学の特徴的傾向をいっそう明確にするために、今後、それらの親和性の具体的なあり様を解明する必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①米田昇平, 経済学のフランス的起源―世俗的倫理と世俗化の論理, 下関市立大学論集, 査読無, 58(2), 2014.9, pp.105-115.

②米田昇平, 啓蒙の経済学―アベ・ド・サン＝ピエール、ムロン、モンテスキューの商業社会論をめぐって―（下）,下関市立大学論集, 査読無, 57(2),2013.9,pp.53-71.

③米田昇平, 啓蒙の経済学―アベ・ド・サン＝ピエール、ムロン、モンテスキューの商業社会論をめぐって―（上）,下関市立大学論集, 査読無, 57(1),2013.5,pp.39-56.

〔学会発表〕（計５件）

①米田昇平,「経済学のフランス的起源」経済学史学会西南部会,下関市立大学,2014.11.29.

②米田昇平, セッション「啓蒙の多様性と多元性―最近の研究動向から」の第二報告「フランス啓蒙―商業社会論の視点から」第 36 回社会思想史学会, 明治大学, 2014.10.26.

③米田昇平, Ｊ・Ｆ・ムロンの商業社会論―啓蒙の経済学―, 経済学史学会全国大会「セッション：野蛮、啓蒙と経済学の形成」関西大学, 2013.5.25.

④米田昇平,経済学のフランス的起源―ボワギルベールを中心に―,日仏経済学会,福山市立大学,2013.5.18.

〔図書〕（計４件）

①米田昇平, 坂本・長尾編,徳・商業・文明社会,京都大学学術出版会, 2015.3, pp.123-143.

②米田昇平, 田中秀夫編著､野蛮と啓蒙―経済思想史からの接近, 京都大学学術出版会, 2014.3, pp.331-358.

６．研究組織

(1)研究代表者

米田　昇平（YONEDA　SHOHEI）

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：20182850

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし